

平成30年度 第5回講演会 記録

日 時	平成30年6月9日(土) 13:00~16:00		
会 場	此花会館 梅香殿		
講 師	京都大学名誉教授 池上 惇 先生		
演 題	遠野のふるさと学校が開く未来:文化資本論序論		
備 考	参加者 173名 +聴講者 1名		記録 船本浩路

1. 田中克先生の開会のご挨拶

- 池上先生は経済学や文化資本関係の著名な研究者であり、現役時代、研究分野では直接のご縁はなかったのですが、経済学部長として大学の運営、また教職員の立場を向上させることにも尽力されるなど、非常に尊敬している先生でした。京大農学部畜産学科で研究されていた奥さまとは交流があったことから、「地方をよくすることで日本の再生を」という考えのもとに、人間力(文化資本)をうまくはぐくみながら、地に着いたご研究をされていること知り、是非本講座でお話を伺いたいと思っていました。
- 我々は持続・循環を大事にする賢い選択をしない限り、続く世代の幸せはないということは認識していながら、なかなかそれを実現に移せない状態にあります。そのような中で、今日のお話はしたら我々自身をコントロールしながら、続く世代に確かな未来を届けることができるのかとの問に対するヒントをいただけるものと期待しております。

2. 池上先生のご講演内容

今日は地を這うような話ばかりになるが、今の日本の地方の地域がどういうものかを考える時の参考にいただければ有難い。

<遠野物語の本質>

- 話題にする地域は岩手県南部の遠野市。この町は民俗学の日本の草分け的存在である柳田國男(1875~1962)が著した「遠野物語」の舞台となった地である。
- この物語は東北地方の民話を収集した地元の佐々木喜善が語ったものをそのまま文章にしたもの。民話を知れば今の日本社会がわかり、これからの日本のあり方がわかるというように佐々木先生がおっしゃって、柳田先生もそうかと思って記録したもの。
- 一番有名なのは「昔、山の民と里の民がいた・・・」というくだりである。里の民は日本の西方から稲作と共にやって来た。稲作文化は北へ北へと拡大移動し東北にも定着した。お米は蓄積ができ持続的に生産できることが人間にとって大きな魅力だった。
- 他方、山の民は、物語では馬として登場する。民と書いてない。馬と里の娘が恋をする話が一番有名。山の民は鉱山で働く人だった。遠野の山は7世紀ころから金山で有名だった。金山のほとんどは山伏が発見したものだ。
- 山の民は高い文化を持っていた。それが里の民と出会ったときに何が起こったか?それが遠野物語の主題である。悲惨なことが起こった。里の民の女性が山の民の男性に憧れても絶対に許されなかった。そういう厳しい対立があった。娘の父が相手を聞いて怒り心頭に発して馬を殺してしまう。そして木に吊り下げたところが、娘が悲しんで自殺し、二人して天に昇った。ところがその後にマユが残った。マユから糸がとれる。東北地方一帯にオシラサマ伝説あるが、ほとんどの場合股に分かれたような木のシンボルがあって、その木



に繊維を巻き付けてある。女性が神の教えを伝える際の道具であったと言われている。こういうものがマユという形で表現されたということは、その当時日本においてカイコを飼ってマユを作り、糸を取り、そこから繊維をとる。つまり日本の産業の曙がそこから生まれたと言われている。

- ・両者の対立が厳しくて、この世の中では認められなかったけれど、その両者の文化の交わったところから素晴らしい産業が生まれて人々に幸せをもたらしたという話である。これは現実の生活に照らして作った物語である。民衆の生活そのものの中から厳しい対立を乗り越えて新しい技術や産業が生まれたことが重なっている。

<遠野（人）と文化資本>

- ・遠野との最近のご縁は東日本の大震災。幸い、遠野はそれほど大きな被害は無かったことから、後方支援基地として被害の大きかった沿岸の地域を支援した。
- ・大道具をもって支援に行かれ、そして現実にはその地域を再生されて引き上げて来る。ボランティアとは一味違う支援活動である。遠野の方々の手仕事の達人なのでそれができる。
- ・遠野は工芸品の質が非常に高い。また、お雛様の質の高さにも驚く。これらは今でも伝統の手仕事として残されている。これは同時に農業の水準が高いことを示している。
- ・建築技術も格段に高い。普通の人々が普通に家を作ってしまう。かつての日本人は山から木を伐り出して自分で家を作るなどの職人技を持った人が多かった。この職人技を私は**文化資本**と呼んでいる。この技は長い歴史をかけて心をこめて育ててきた。
- ・職人技は出来上がった建築物の外観からは見えないが、人が身につけている貴重な財産である。これを身につけている人は大震災があっても自分の力で生きていける。東北のかなりの方はそれができる。自分たちでコミュニティや繋がりを作り、自分たちで生きていく力を持っている。阪神淡路の震災では自分たちで自分たちの家を建てることはほとんど不可能だったが、こちらではやってのけた。私はこのことに感動した。
- ・文化資本は目に見えないけれども、一人一人が持っている財産のこと。様々なお祭り（見事な獅子踊り）を行う力量もそうだ。この祭りには4～500人ぐらいの単位の保存会があり、地区ごとに見事に継承している。地域のすごいエネルギーを感じる。生きるにおいて知恵や財産として持つておられる。一見してそんなものを持っているようには見えない普通の人間。それが貴重な文化資本というもの。
- ・遠野の方々には貴重な文化資本を人から人に伝えていく際に、例えば遠野物語という一つの作品を通じて自分たちの持っている力を次世代に伝えてきた。
- ・とりわけ産業文化は人を養うに足るだけのものを生み出す。例えば絹織物に代表されるように、そういうものを生み出した力を文化資本として継承発展させてきたように感じる。

<現在に引き継がれている遠野の文化資本>

① 遠野緑峰高校の事例

- ・遠野の緑峰高校での取り組みは「遠野物語」の魂を引継いでいると感じたので紹介する。この元学校長が日本一古い早池峰神社の横の廃校校舎（小中合同の学校）を利用して後述の「ふるさと学校」を開かれた。
- ・この学校の一つの狙いは農を通じて先人たちからの様々な文化資本、生活の知恵や技術や理論を次世代に伝える仕組みを作ることであり、高校生と篤農家との出会いの場として校内に農地も確保した。
- ・遠野は今でも手織りが有名だ。その手仕事力は今でも遠野に残っている。先人から継承され、それを創意工夫してもっと良いものを作ろうという人が多いのが遠野の方の特徴。その精神は高校生たちも同じだ。

- ・彼らは、ホップ和紙の開発に成功した。ホップというのはビールの原料。利用後は茎がほとんど廃棄物となり、燃やすしかなかった。ホップの収入だけでは農家は立ちいかなかったので、廃棄物を有価物に変えることを考えた。リサイクルができて紙や繊維になれば農家の収入を増やせるという非常に強い期待があった。この期待に高校生が応えようとした。
- ・高校生がチャレンジするも失敗の連続。農家がいくらやってもうまくいかなかっただけに、高校生も最初はどううまくいかず苦勞に苦勞を重ねていく。その際の一番のポイントは漂白剤の大量使用であった。これはコスト面を始めあらゆる面でロスが大きかった。できるだけ漂白剤を減らして白い和紙をどう作るかが大きな課題であった。
- ・農家の失敗例を聞き取り、学びながら必死に努力した。その際に彼らが一番注目したのは、先人である農家のやっていたアイデアを自分たちで受け止めて発展させたことだ。例えば、和紙作りの過程でホップの^{ふし}節が入ると黒くなりそれを除くと白くなったこと。
- ・今度は彼らが紙すきの技術を身につけて地域の農家に教え、同じ技術水準まで持っていき、お互いにアイデアを出し合いながら解決に向けた。この中で生徒は、先輩から知恵の語り継ぎを受け、創意工夫してそれを超えていくことの大切さを認識した。これは日本語では守（継承すること）離（守るだけではだめだから離れる）破（それとはまったく違うアイデアを出す）と言われ、職人の間で伝わっている言葉だ。
- ・彼らは先人の知恵をヒントに、漂白剤を使わずに白い紙作りに成功した。それに対する支援の動きも出てきた。国体の時に使う表彰状や卒業証書などに利用された。紙を使う人の立場と生産する人の立場が対話しながらよりよいものを作ろうという方向に向かう。ものづくりの鉄則と言われている。ここまで到達するのは並大抵ではない。これは遠野物語を継承してきた地域における一つの特徴というか力のように思う。これは高く評価されて、最後に文科省が表彰してくれた。

② ふるさと学校について

- ・ふるさと学校作りは緑峰高校の藤井元校長が中心となり、この地域の農業がより楽しく、皆が参加してできる産業として発展するには何が必要かを考え、校庭に実践の場としての田んぼや畑を作り、親も子も先生も共に汗を流し、意見交換をし、進むべき方向を考えるスタイルを取った。
- ・先生は農業だけでは不十分と考え、わらじ作りの研究、木工、そばうち道場、産直市場（地元の物産を持ってきての販売）を開くことを考えた。
- ・次に多くの都市住民に来てもらうために東京圏で東北出身の市長を探した。幸い秋田県出身の市長が見つかり、その市長に夏休に農村留学の家族連れを送ってほしいと頼んだ。第二の故郷として遠野の滞在が役立つことを訴えると、市長さんが理解を示してくれた。今、名古屋と東京の二つの市から毎年4〜5千人が訪れる。
- ・遠野は環境が良く、人情が厚く、食いもの、とくに米・野菜・食肉・乳製品・お菓子などが美味しい。そういう中では人の物に対する考え方が変わっていくのは自然の成り行きである。都市的生活と農村生活の二つの生活を知った人間が出て来ることは非常に意味のあることだ。
- ・都市には職業能力を身に着ければ職業が自由に選べるだけの職業の多様性がある。しかし、この能力はもともと宮使いという言葉に代表されるように人々に仕えるために、あるいは月給をもらうために止む無くつけたものなので、本来の自分の力になるということが少ない。ところがその人たちが農村にやってくると、自分の様々な力量が発揮できるが場が提供される。例えば経営する力量は、もともとは、人を働かせるためのものだったが、農村では地域をつくり、仕事を起こすためのものとなる。また、都市と農村の住民が語り合うことでお互い良い刺激になる。

- ・震災復興の時、最初に求められた仕事は建築とか食事を作るなど身の回りのものを自分の職人的な力で作っていく力であった。その次に電気の配線とか文明生活で必要とされた技術や知識であった。それは実は都市生活者から、特にサラリーマンや技術者から多くの知恵を得た。また経営も都市生活者から多くの知識をいただいた。そういう意味では都市と農村の学びあいの場が必要である。これを文化資本の交流と呼ぶことにする。
- ・つまり、「ふるさと学校」作りの意義は、現実にはそこで蓄積してきた文化資本の継承する場ができて、そこでは農村の人だけじゃなくて都市の人も参加していること。都市の人が農業や林業に、そして様々な地域の景観、文化財に興味を持たれば人生の新しい契機になるのは確実である。いい機会を藤井先生は作られたと実感した。
- ・その中から継承する人が出てくればベストだが……。それには都市から農村に定住したいという希望者を募って農業を教えることも大事。藤井先生はその仕事もされている。アグリスクールという。今のところ、定住希望者が多いのは芸術家層。芸術的な創造性というものは、都会ではどうもアイデア枯れになってしまう。ここへ来ればいくらでもある。
- ・森里海のつながりでは「連環」という概念があるが、ふるさと学校からも「都市と農村の交流」という新しい循環の概念ができた。日本の市民生活の中に新たな可能性が生まれると考えられる。

<ふるさと創生大学づくり>

- ・田中先生がおっしゃるように、山があつて海があつて里があつて地域全体を見渡しながらの震災復興や町づくりが必要だと痛感して、遠野の隣にある住田という町に校舎や土地を求めて、これから学校（ふるさと創生大学）を始める段取りとなっている。住田は気仙川の源流にあり、そこから水が発し湾に注ぐ、地域全体を見渡せ、また宮沢賢治も愛した町。彼の「星座ものがたり」はここから生まれたともいわれる。
- ・先程の遠野緑峰高校の生徒に学ぶなどして産業に関する研究開発ができる人材を育てながら、その人たちが起業できるようにしたいと考えている。
- ・目に見えないけれど一人一人が持っている貴重な財産である文化資本を開花させる場を作り、お互い語り合っ、きちっとした研究開発をし、その成果を事業化し、信頼できる顧客と手を組んで注文生産によって事業を成り立たせる。
- ・例えば、西陣織のネクタイでは、西陣に来るお客さんには、ここの職人さんでないと困るという人がいる。それはその人が注文したものに対して西陣の職人は期待される以上の物を作る力があるからだ。これが顧客優先の商売だ。
- ・いまの日本は東京と一部の都市を除けば人口が減少傾向、特に地方。これが続けばいくつもの地方が消滅しかねないという本さえも出ている。それは単に人を物と同じように数だけで見るからである。一番の問題なのは人口が減っている地域でも、そこには豊かな文化資本を持った多くの方がおられるが、その方々の後継者がいないこと。また、それを語り継いで発展させる場がないことである。
- ・遠野の方々はそれを「ふるさと学校」という形で現実にはそこに人を呼び戻して、もう一度農村地域に賑わいを取り戻す手がかりをお作りになった。その経験を生かして、さらに保育環境を改良し出生率を高めるなどして人口が激減しないで適切な規模の人口が徐々に回復していく展望を開きたい。
- ・ふるさと創生大学はその最初のモデルである。5 月に学校を作ったところ、たくさん応募していただいた。現地の方が 50 人以上集まり驚いた。全国各地から支援のためにこの地に来たという方がかなりいた。復興関連で働けるので定住されている方も多い。人生経験の語り合いをしたが、二か所以上の地域で生活経験した

方がおられる。今のところ動機は震災復興支援や、親の介護のためという方々が多い。彼らは、一面では忙しくて、健康がおかしくなるという危険も感じておられるようだが、地方暮らしを経験する中で地域を何とかしたいと考える方が増えているのには驚かされた。

- ・この学校は体験学習と、地元で働ける職業能力の育成、環境や社会の危機に応答できる人間発達を目指している。さらに単に教科を教えるだけではなく、ふるさと学校のように篤農家であれば農業を、木工家であれば木工、建築家であれば建築を教えてもらい、産業であれば地域の特色ある産業をベテランの経営者・技術者から生産や販売、消費の仕方を教えていただく。つまり、文化資本を学びあい育てあう場ができれば、そこに人口が再生するきっかけができると考える。
- ・また、生涯学習あるいは生涯研究も大切であるとともに、研究や創意工夫する能力が身につくように自発性を生み出す場づくりをしないといけない。受身でなく、自分から新しいライフスタイルを作り出せる教育が求められる。
- ・その際の、教育費の捻出をどうするかは我々の大きな課題だ。教育は無料かあるいはごく少額でなければいけない。ある意味でこの取組みに共鳴していただき、寄付や協賛金を出しましょうという方々のご支援があつてのことである。そうでないと持続的発展は成り立たない。
- ・生涯学習事業協賛金（お一人一万円、一万口が目標です。一億円あれば・・・）を集めたい。これには役立つ経営情報と学術情報を必死になって発信するとともに、それと併せてのライブラリ情報として人生体験記録も入れることが大切。よく売れる書籍は一人一人の人生について書かれたものだから。私たちは学びあい、育ちあう場と、そこから多くの人々のご参考となる学術や芸術の情報がうまれ、受け手と対話しつつ、さらに広いつながりの場が生まれるよう努力したい。
- ・以上、厳しい課題があるが、挑戦することに価値がある。日本の各地にふるさと学校の創設を推進すれば、日本社会が大きく変わると思っている。

4. 講演に対する質問

Q1：子どもは自然の中に放って育てるのが大切だと思うが如何なものか

A1：全くその通り。ふるさと学校では子どもを気仙川源流にてイワナの手掴みをさせる。これが何にも代えがたい教育。自分に対して自信を持った表情に変化していく。防災教育と同じようにあらかじめ危険を認識させたうえで実施する。農村の教育者はほとんどそのことをわかっている。課外授業では一般に危険に近づけない指導が多くなっているが、これはかえって危険となる。農村の先生方は危険に対する知識は豊富で、きちっと対応してくれる。この点は都市の先生も勉強してほしい。「手をださないで目を離すな」が大事だ！

Q2：種子法の廃止が地域の復興（再生）活動に影響しないか

A2：種子法は深刻な問題。バイオテクノロジーが進み、遺伝子組換えによる農作物の種子そのものを変えてしまうという世界的流れが進行中。とりわけアメリカはその最先端を走っている。

- ・国際的にも種子そのものの遺伝子管理を強化する方向を目指している。日本は抵抗してそれぞれの国に開発の自主権を持たさなければならぬことを強く主張すべき立場にある。
- ・へたをすると遺伝子組み換え作物の輸入の自由化につながりかねない。それが入ると、日本独自の種子を改善し良き種子を育ててきた伝統に対しては採算上の大きな困難が生じる。それを許すと日本の農業の根幹が崩れる。特に遺伝子組換え技術を利用しない有機農業に大きな障害が生じる。有機農業を維持するには、飼料や土壌の改良、そういうものを含めて自給自足できる総合的なリサイクルシステムを確立しない

といけない。しかし大協同組合が協力してくれないと前へは進まない厳しい問題でもある。

5. 田中克先生の開会のご挨拶

- ・今の社会は結果や即効的な見えるものばかりを求め過ぎではないかと思われます。その対局が今日お話にあった見えない存在としての文化資本ではないでしょうか。それは日本の伝統というか、古来よりの知恵のような縁の下の力持ち的な存在として、人が人らしく生きる根源のように思われます。
- ・何事も結果に至るまでのプロセスこそが大事で、その中で人が鍛えられ、それが新しい社会を作っていくのだと感じています。今は、極端に言えば、結果さえよけれ(すぐに役に立てば)、プロセスも縁の下の力持ちも不要ということになっています。お話を聞聞きして、先生は口にこそお出しなりませんでした、この国の今の有り方への根源的な問題提起をされたものと強く感じました。
- ・地球全体の人口増が進む中、中国がこのまま GNP 5~6%の経済成長を続けるとすると、10 年後には資源の枯渇や環境破壊で地球は破局を迎えかねない事態に至っています。
- ・しかし、人間には知恵があり、自己規制しうる文明を生み出すにはどうしたらよいか考えることができます。その道は原点に戻ることに。自然に依拠した生き方をもう一度取り返さないといけないと思います。
- ・新しい農業を地域の核にしながら、どうすればこの難局を乗り越えていけるのか。今日は貴重なヒントを沢山いただきました。資本には文化資本と自然資本があります。従来、文化資本の対局は経済資本としてのお金でした。このお金はどちらかと言えば量のことです。現在、それよりも大事なものは質だと思います。それはまさに文化資本です。本日の先生のご講演をお聞きし、自然資本と文化資本を紡ぎ直して続く世代への橋渡しの研究を、最後の仕事として、先生の力もお借りしながら進めたいとの思いをより強く抱きました。

6. 記録者所感

今回の講演で、文化資本という言葉を知った。私の大好きなアユ釣りを思い浮かべた。アユの友釣りは日本独特のもので、日本の伝統的な釣り文化の一つでもある。今でも伝統の釣法が脈々と引き継がれ、熟練の技が釣果を支配する釣りであり、まさに文化資本という言葉が当てはまる。しかし、ダムなどを含めて河川環境の悪化でアユの数が減ったこと、仕掛け作りに手間がかかること、釣りそのものが難しく慣れるのに時間がかかることなどが今の時代に敬遠されるのか、アユ釣り人口が減ってきている。特に若い釣り人が少なくなった。このままでは将来はこの釣り文化が消滅するとまでいわれている。そんな中で、和歌山県内水面漁連は若者にもアユ釣りに親しんでもらおうと、遊漁券の無料提供やアユ釣り教室の開催、道具の無料貸出などを行っている。とても嬉しい企画だと思う。お話の中で、豊かな文化資本を持った多くの方に後継者がいないことはそれを語り継いで発展させる場がないことも原因の一つだとの先生のご指摘はまさにその通りのように思った。

地球環境自然学講座では田中先生のコーディネートによる自然観察会が多く催されている。対象が自然なこともあり、行先はすべて自然豊かな地方である。行く先々では地域の方々から心温まるおもてなしを受けるお蔭で素晴らしい自然はもとより、美食、地域文化にも出会った。正直、観光気分で訪問しているところも否めなく、厳しい状況の地方に接しても「大変でしょうが頑張ってくださいね」としか言えない自分に虚しさを感じてしまうこともある。

最近、地方の課題に対して都市にもその解決のための支援が必要だと感じている。特に大都市住民はそういう認識を持つべきだと……。都市を一つの生態系と捉えた場合、大都市は飲料水然り、食料然りで生命を維持するために必要なものが都市内部で循環できていない不完全な生態系である。多くは周辺の自然や農山漁村に、そして今では諸外国にも依存している。大都市に多くの生態系サービスを提供してきた地方、特に農山漁

村に対する社会的責任（SR）を考えることが大切のように思う。それは個人のレベルから行政、企業、大学、NPO などの多様な主体がそれぞれの立場で果たし、トータルとして都市全体が SR に関する活動を実践しているイメージが目指すべきものなのだろうか。

以上